

キーワード：ハザードマップ 体験・見学で知る防災教育 防災・安全マップ 感染症対策

I 研究について

1 はじめに

日本は地震や台風が多い自然災害大国である。時に自然災害では、想定を超える災害が起こる可能性があり、習得した知識に基づいて的確に状況を予測・判断し、自ら危険を回避するための迅速な行動力を身に付けていく必要がある。防災教育は、究極的には自分たちの命を守ることを学ぶことであるが、学校における防災教育のねらいとしては、防災学習や各種訓練等を通して、災害や防災について正しい知識を身に付けるとともに、災害発生時には自らの安全を確保したり、自分の役割を自覚して行動したりする等、「自ら考え、判断し、行動する力」の育成を目指していくことが求められている。また、ウイルス感染症も自然災害の一つであると捉え、子どもたちに感染症に対する正しい知識や対策を理解させることで、「自分の命は自分で守る」ための適切な行動や他の人の安全についても配慮できる児童を育成していく必要がある。

2 防災教育に関する学校の実態

本校は須賀川市の西部に位置し、周辺には田園風景が広がり、豊かな自然環境に恵まれている。市が作成しているハザードマップにおいても、洪水・土砂災害想定区域外となっており災害に対する危機意識や自助・共助意識に温度差が見られる。児童は地震や台風への関心は高いが、自然災害発生のメカニズムやその危険性を理解し、災害発生時に自ら主体的に考え、適切に判断して行動する実践力が十分身に付いているとはいえない。

自然災害は、「いつ」「どこで」「どのように」起こるか分からず、想定を超えた災害が起こる可能性もある。そのため、児童の日頃の防災意識を高め、危険を回避する能動的な力を身に付けさせることが重要な課題であり、教科等横断的な指導計画を作成し、組織的・計画的・系統的に防災教育に取り組んでいく必要がある。

3 防災教育の授業づくりの視点

(1)「自ら考え、判断し、行動する力」を育成するため、児童の思い（～したい）や願いを踏まえた「問題解決型」にする。

- 育てたい資質・能力を明確にしたねらいの設定（単元の目標・評価規準の確認）
- 教材提示の工夫
- 授業のねらいに基づいた課題の設定（既習内容との関連）
- ねらいを達成するための見方・考え方（知識・考え方の活用）を働かせる活動の工夫
- 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた交流場面の設定

- 子どもの変容（気付き・発見・広がり・深まり）を多面的に見取る本時の振り返り
- （２）家庭や地域、関係機関と連携した防災力の推進を図る。
- （３）病原体から身を守る方法を学習し、感染症対策の理解を深める。
- （４）自助・共助・公助の意識を高め、地域の安全を意識した社会参加型の防災活動を推進する。
- （５）総合的な学習の時間を柱に、各教科や特別活動等の関連を明らかにした放射線教育・防災教育指導計画を作成する。

放射線教育・防災教育に関する主な領域及び指導内容（第5学年）			
防災教育の学年テーマ →災害や防災について正しく理解し、お互いに助け合いながら、命を守りぬく力を身に付けよう。			
	1 学期	2 学期	3 学期
学校行事 児童会活動	避難訓練（4月） 異年齢集団による交流	交通教室（9月） 避難訓練（11月）	避難訓練（1月）予告なし
道徳	生命の尊さ「おばあちゃんが残したもの」「コースチャぼうやを救え」「クマのあたりまえ」 家族愛「お父さんのお弁当」 親切・思いやり「ノンステップバスでの出来事」「くすね落ちた段ボール」 勤労・公共の精神「お父さんは救命救急師」「わたしのボランティア体験」 感謝「ありがとうを上手に」		
国語	○目的に応じた引用について（6月） ・目的に応じて、震災に関連した材料を分類したり関連付けたりして、調べたことを正確に報告する。	○新聞を読もう（9月） ・震災に関する事実と感想、意見などとの関係を押さえ、論の進め方を理解する。 ○資料を用いた文章の効果（10月） ・震災に関する統計資料を集め、自分の考えを裏付けるものとなるかを考えながら、表やグラフを用いて書くこと。	○想像力のスイッチを入れよう（1月） ・事例と意見（印象）の関係を押さえて読み、考えたことを伝え合う。
社会	<わたしたちの国土> ○国土の地形の特色（4月） ○国土の気候の特色（5月） ・自然災害の防止について学習する。	<情報化した社会と産業の発展> ○情報を生かす産業（12月） ・地震や災害を即時に伝える取り組みについて学習する。	<わたしたちの生活と環境> ○自然災害を防ぐ（2月） ○環境を守るわたしたち（3月） ・国や地方公共団体による災害復旧の取り組みを学習する。
算数	<比べ方を考えよう>（11月） ・体育館の面積と避難者の人数から、込み具合の比べ、単位量当たりの大きさを考える。 <割合>（1月） ・二つの数量の関係について、割合で比べたり、百分率による割合の表し方を理解する。		
理科	<天気の変化>（4月） ・天気の変化は、雲の量や動きと関係があることを理解する。	<台風と天気の変化>（9月） ・雲の量や動きに着目して台風の動き方と天気の変化の仕方を調べる。 <流れる水の動き> ・川の水によって起こる災害や災害に対する備えについて、調べたり考えたりする。	<電流がうみ出す力>（1月） ・電流がつくる磁力について、身の回りの道具を調べたり、電力の発生について、学んだことを学習や生活に生かしたりする。
総合	<災害から身を守るよう> ○過去の災害を教訓として、災害が起きた場合に備え、命を守るための行動や備えを理解する。 ○「コミュニティ福島」見学学習 ・放射線や放射能、放射性物質について理解し、放射線から身を守る適切な行動を考える。 ○「防災出前講座」 ・土砂災害のメカニズムや危険性を理解し、自然災害から自分たちの命を守るための知識と行動力を身に付ける。 ○「県危機管理センター」見学学習 ・県危機管理センターを施設見学し、様々な防災教育を学習することを通して、命を守る行動や備えることの大切さを学習する。		
家庭	持続可能な暮らしへ（7月） ・環境や資源に配慮した生活を考える。	上手に暮らそう（9月） ・食事の役割と栄養のバランスを考える。	ミシンにトライ（1月） ・手づくりのよさを生活に生かす。
体育（保健）	<心の健康> ・適度なストレスと心身の成長について理解する。	<感染症の予防> ・感染症の予防には、病原体が身に入るのを防ぐことや抵抗力を高めることの必要性を理解する。	<けがの予防> ・災害での事故やけがの多くは、人の行動と周りの環境が原因で起こっていることを理解する。
学級活動	<放射線について考えよう> ・放射線等に関する知識を得る。 <放射線から自分を守るよう> ・放射線の種類、性質、利用について知る。		
地域連携	○地域探検	○PTAによる危険箇所点検 ○児童引き渡し訓練	

4 防災教育にかかる実践の概要

月 日	学年	主 な 学 習 内 容
6月23日	1 年	校内授業研究会 <実践1> ○学級活動「かぜに負けない子」 ・かぜの予防について正しく理解し、適切に行動することができる。
7月 1日	1 年	「防災個人カード」の配付と家族会議の開催 ○災害時の対応について家族と話し合い、カードの記載を通して、親子で防災意識を高める。
7月12日	P T A	P T Aによる危険箇所点検
8月27日	5・6年	ムシテック・ワールド体験学習 <実践2> ○放射線や放射能、放射性物質について理解し、放射線から身を守る適切な行動を取ることができる。
8月28日	全学年	第1回避難訓練 ○避難経路の確認と避難場所を周知し、安全・確実（お・か・し・も）に避難する行動力を身に付ける。
9月25日	2・3年	校内授業研究会 <実践3> ○学級活動「上手な避難の仕方」
9月29日	5・6年	県中建設事務所による防災教育出前講座 <実践4> ○土砂災害のメカニズムや危険性を理解し、自然災害から自分たちの命を守るための知識と行動力を身に付ける。
10月 9日	5 年	コミュタン福島見学 ○放射線や放射性物質について理解し、放射線から身を守る適切な行動を考える。
10月16日	6 年	校内授業研究会 「体育（保健）」 <実践5> ○病気の予防 感染症の予防には、病原体が身体に入るのを防ぐことや病原体に対する抵抗力を高めることの必要性を理解する。
11月16日	全学年	第2回避難訓練（予告なし） 自然災害（地震）の危険から身を守るための訓練（倒れてこない、落ちてこない、動いてこない）を実施し、全員が安全な場所へ避難する行動力を身に付ける。
11月26日	2～5年	県危機管理センター見学 <実践6> 県危機管理センターの施設見学（見て・聞いて・体験する）を通して、命を守る行動を促す防災意識の定着を図る。
12月 4日	4・5年	授業公開 <実践7> 「総合的な学習の時間（『さいがい』から身を守ろう）」 <公開授業>
1月28日	6 年	講演 滋賀大学大学院教育学研究科 教授 藤岡 達也先生 東日本大震災・原子力災害伝承館の施設見学 <実践8> 伝承館の施設を見学し、複合災害の現状を理解するとともに、復興に向けた取り組みを学んだり、これからの地域づくりを考えたりする。

Ⅱ 研究の実際について

1 校内での実践

(1) 校内授業研究会 第1学年「かぜに負けない子」 <実践1>

① 本時のねらい

かぜの予防について正しく理解し、適切な予防に努めることができる。

② 内容

ウイルス感染症も災害であると捉え、子どもたちに感染症に対する正しい知識を学ばせることを目的に授業を展開した。「マスクの着用、換気、手洗い」という普段から自分たちが行っている予防が「感染経路を断つ」という意味を理解させるのが目的である。授業では子どもたちに身近な「かぜ」を題材に、ばい菌からウイルス感染の経路（飛沫感染、接触感染）をパペットや動作化等で考えさせ、ウイルスがうつらないようにどのように感染経路を断つかを考えさせていた。ウイルスの侵入を防ぐには、丁寧な手洗い、消毒、マスクの着用、換気、距離を取ることに



について考えを深めていた。

T2の養護教諭からは、「人間の体には万が一ウイルスが侵入してきても、ウイルスと戦う細胞（抵抗力）があり、咳・くしゃ

み・熱等も抵抗力の一部である。その細胞を元気にしておくためには、『十分な睡眠、バランスのよい食事、適度な運動＋笑い』による健康的な生活が大切である。」という話があり、普段の生活習慣が大切であることに気付かせることができた。



(2) 第5・6学年 「放射線から自分の身を守ろう」 <実践2>

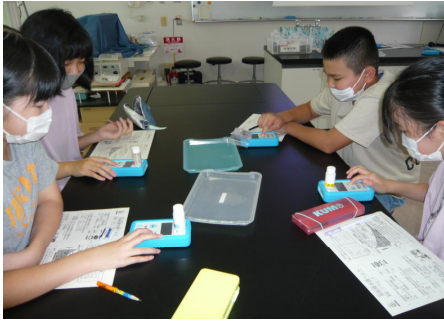
① 本時のねらい

放射線や放射能、放射性物質について理解し、放射線から身を守る適切な行動を取ることができる。

② 内容

子どもたちは、放射線が目に見えないことや身の回りにあること、健康に影響を及ぼすことについては理解しているが、放射線に関する基本的な知識が不足している。このことから、放射線から身を守る方法や日常生活で利用されていることなどについての知識を身に付けていく必要がある。

ムシテック・ワールドでは、霧箱の放射線を観察をしたり、放射性物質に含まれる放射線量を比較したりしながら、身近にある放射線について学習した。また、放射線は、ウイルスや菌とは異なり人から人にうつるものではなく、身の回りにある様々なものに含まれていることについて理解を深めた。児童は、健康的な生活を送るために、心がけることについて、自分なりの考えをもつことができた。



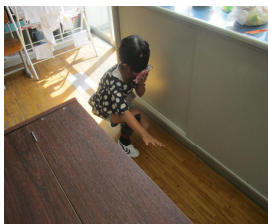
(3) 校内授業研究会 第2・3学年「上手な避難の仕方」 <実践3>

① 本時のねらい

災害について正しく理解し、適切な避難の仕方について、考えることができる。

② 内容

ニュースや新聞等で気象の変化によって起こる「災害」の種類については、多くの子どもたちが知っている。しかし、災害の「何が危険か」までは思いが至っていない。そこで、様々な気象によって引き起こされる具体的な災害とその危険性、そして適切な避難の方法を学ぶことで、防災教育のねらいが達成されるだろうと考えた。



授業では、「災害の種類」を挙げさせ、地域の実態に即した避難の仕方を考えさせた。特に、市の「ハザードマップ」を活用し、自分たちが住んでいるところの地理的な位置や過去に起こった災害状況を確認することで、避難が必要かどうかを適切に判断して行動することの大切さを理解させることができた。

(4) 第5・6年 「防災出前講座」 <実践4>

① 本時のねらい

土砂災害のメカニズムや危険性を理解し、自然災害から自分たちの命を守るための知識と行動力を身に付ける。

② 内容

県中建設事務所による防災教育の出前授業を行い、土砂災害の仕組みや被害、そして、その災害から自分の命や家族、地域の安全を守るための知識等を写真や映像、模型を使って分かりやすく説明していただいた。5年生は「台風と天気の変化」、6年生は「変わり続ける大地」の学習の中で、予想される災害やその災害から命を守るための施設や資料（ハザードマップ）について学習していたので、説明内容をよく理解することができていた。子どもたちからは、「映像や模型から洪水や土砂災害発生システムが分かった。いつでも避難できるようにハザードマップで避難



場所と避難経路を確認し、非常時に持ち出す物を準備しておきたい。」との感想が聞かれ、自然災害の危険性や防災の必要性を実感していた。日本の国土は土地の傾きが大きく、大雨による土砂災害が起こりやすい特色がある。今後ますます起こり得る被害を想定して「備える」ことが求められるので、計画的・継続的な防災教育に努めていく必要がある。

(5) 第6学年 校内授業研究会「感染症の予防」 <実践5>

① 本時のねらい

感染症の予防には、病原体が身体に入るのを防ぐことや病原体に対する抵抗力を高めることの必要性を理解することができる。



② 内容

様々な感染症の予防が喫緊の課題になっている昨今、感染症を予防するためにはどうすればよいかについて、自分の生活経験や友だちとの交流を通して考えた。ワークシートを活用し、感染症を防ぐ方法を「病原体をなくす」「病原体のうつる筋道を断つ」「体の抵抗力を高める」から考え、友達と知っていることをじっくり話し合っ て予防策を分類し、実践に結び付けようと学習を深めていた。また、咳・くしゃみ・熱なども抵抗力の一部であり、体の抵抗力を高めるために、「バランスのよい食事、十分な睡眠、適度な運動」の必要性や人間の内なる力を高めることの重要性を理解することができた。

(6) 第2～5学年 「県危機管理センター」見学学習 <実践6>

① 活動のねらい

県危機管理センターを見学し、様々な防災対策を学習することを通して、命を守る行動を促す防災意識の向上を図る。

② 内容

自分たちの地域では大きな災害は起こりにくいと考えている子どもたちが多く見られ、災害から「自分の命は自分で守る」ためにどのような行動に結び付けていくかを十分に理解しているとは言えない。「危機管理センター」は、災害に備えるための拠点としての役割を担っている。見学では、VRによって目の前で災害が起きた場合の状況を捉えたり、各関係機関との情報共有や連携を学んだりして、災害に備えておくことで県民の安全・安心につながるということが理解できていた。

＜児童の感想＞

- 県危機管理センターで学んだことは、地震などの災害の強さです。人がこれだけ尽力しても自然からの影響を0にはできません。そのことが印象に残り、やっぱり自然は強いなと改めて感じました。
- 県危機管理センターに行って、災害に対する備えの大切さを学びました。災害はいつ、どこで発生するか分からないので、備えることは大切だと感じました。リエゾンオフィスで体験したVRも、本当にそこにいたらと考えると笑える話ではないと思いました。
- 事務局・プレスルーム・備蓄倉庫など、たくさんの部屋があることが分かりました。段ボールで作ったベットは400kgまで耐えられると聞いて、びっくりしました。「命を守るためにできること」という言葉が大切だと分かりました。



非常用持ち出し品



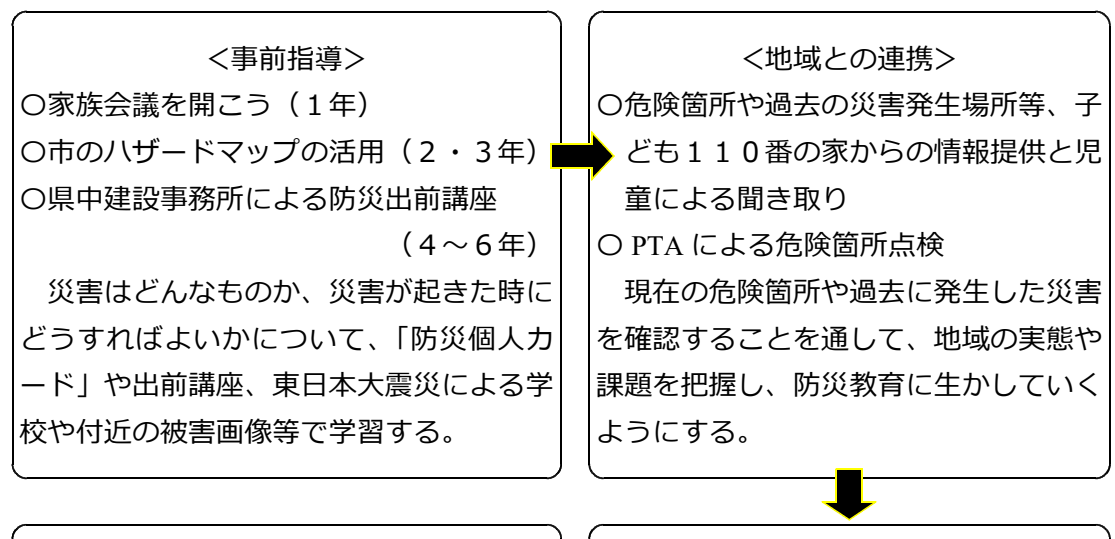
VR体験

（7）防災・安全マップの作成について

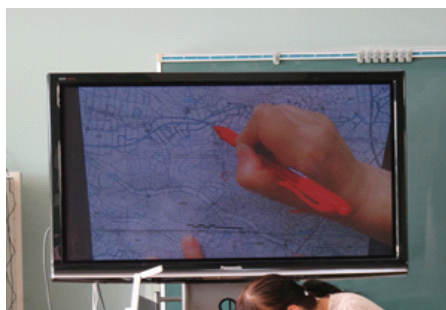
① 防災・安全マップ作りのねらい

- 自分たちの住んでいる地域に関心を持ち、調べ学習を通して、自分たちの地域の特徴や課題を把握するとともに、地域の防災力を理解することで、災害時における対応力を身に付けさせる。
- 児童を通じて、家庭や地域の防災意識の向上や災害への備えの促進を図る。

② 防災マップづくりの流れ



＜防災・安全マップづくりの効果＞ ○「防災・安全マップは、地域の情報を共有し、災害が発生した際に、自主防災活動を推進し、素早く適切な対応するための重要なツールとなった。 ○完成した「防災・安全マップ」を校内に掲示することで、自分たちの地域の危険箇所や安全な避難ルートを確認するなど、情報を共有することができた。 ○過去の災害の場所を掲載することで、地域にそれらの危険性を周知させることができた。	＜防災・安全マップづくり＞ 「防災・安全マップ」とは、地域内で災害時に役立つものや危険なものを地図上に書き込んだものである。「防災・安全マップ」には、以下のような情報を盛り込んだ。 ○避難場所 ○子ども110番の家 ○学区内危険箇所 ○過去の台風被害による浸水範囲 ○防災行政無線屋外支局 ○児童の主要通学路
---	--



2・3年ハザードマップの活用



ハザードマップ、安全・防災マップの校内掲示

（8）東日本大震災・原子力災害伝承館の施設見学 ＜実践8＞

① 活動のねらい

伝承館の施設を見学し、複合災害の現状を理解するとともに、復興に向けた取り組みを学んだり、これからの地域づくりを考えたりする。

② 内 容

子どもたちは、東日本大震災における福島県の複合災害の被害について、写真や映像では学んできているが、震災に伴う被災者の状況については十分に理解しているとは言えない。福島県が経験した、地震・津波・原子力発電所の事故による未曾有の災害は、世界でも類を見ないものである。震災遺産や故郷を追われた被災者の生の声から何を感じるか等、自分との対話を重ねることで、真摯に災害と向き合うことができた。この見学を通して学んだ教訓が、多発する災害への備えや命を守る行動につながり、いずれは、減災を含めたよりよい社会や地域づくりの核になっていくものと考えている。

＜児童の感想＞

・放射性物質が放出されると、その地域の方々は避難を余儀なくされ、大変な苦勞をしたことが分かりました。原子力発電は、二酸化炭素を出さないという利点がある反面、事故が起これば危険なことになるから、そこが難しいところだと思いました。



- ・放射線量の影響で10年経った今も普通に生活できていない方々がいるということを知り、当たり前で暮らせることがすごく幸せなことだと感じた。当たり前を大切にしていこうと思う。
- ・原子力災害により県内外に避難し、まだ帰れていない人が本当にたくさんいることが分かりました。そして、たとえ避難しても亡くなってしまった人が、津波の死者よりも多くいるということについては、他人事ではなく自分たちの課題として受け止めていきたいと思います。

2 公開授業研究会での実践等 <実践7>

第5学年 総合的な学習の時間『『さいがい』から身を守ろう』の実際

(1) 単元の目標

データから日本は自然災害の多い国であることを知るとともに、災害が起こった際にどのようにして自分の身を守るかを考え、家庭において非常用を整えるなどの実践に移すことを通して、実際に自然災害が起こった際に身を守る適切な行動ができるようにする。

(2) 単元全体の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
自然災害について知り、避難行動や、災害に対する備えの在り方に対して理解している。	どのような自然災害に対しても落ち着いて判断し、適切に行動している。	家庭でも防災について進んで話し合い、その成果を共有し、よりよい防災の在り方を考えようとする。

(3) 単元の指導計画(12時間)

第1次 福島県や須賀川市が過去に受けた被害を知ろう・・・3時間

第2次 福島県危機管理センターの見学・・・・・・・・・・3時間

第3次 命を守るための正しい知識や避難の方法を知ろう・・・3時間(本時3/3)

- ・学校で地震が起きた時の危険箇所を知り、どう行動するかを考える(1)
- ・家庭で地震が起きた時の危険箇所を考え、どう行動するかを考える(1)
- ・地震に備えて準備する物を考えよう。(1)本時

第4次 学習したことを新聞にまとめて発表しよう・・・・・・・・3時間

(4) 本時のねらい

自然災害に備え、非常用の物品を準備しておく必要があることを知り、災害時の状況下でどんな物品が必要になるかを話し合い、自分の家に適した非常用持ち出し品を考えることができる。

(5) 本時の学習指導過程

段階	学習活動・内容 ○主な発問	時間	○指導上の留意点 ★評価
導入	1 地震が起きた時取る行動を復習す		T:地震に備えてどんなものを準

入	る。  2 本時の学習課題をつかむ。 地震に備えてどんなものを準備しますか。	5	備すればいいかを考えよう。 C：水は必要だね。 C：ラジオも必要だね。 C：非常食も大事だね。
展開前半	3 東日本大震災時のライフラインの停止について考える。 ○東日本大震災では、地震の後どのような困ったことが起こったのでしょうか。 4 東日本大震災では、何日でライフラインが回復したのかを確認する。  何がどれぐらいの量必要でしょうか。	5	○実施の東日本大震災の資料を提示し考えさせる。 ・家の倒壊 ・食料品等の品物不足 ・停電 ・断水 ・ガスが止まる ○ライフラインが止まった不便な生活がどのぐらい続いたかを確認し、対策を取っておく必要があることを捉えさせる。
展開後半	5 ライフラインが止まるとどのような困ったことが起こるかを話し合い、それに対してどんなものを準備すべきかを考える。 ○地震に備えてどんな物を準備すべきでしょうか。班で相談してボードに書きましょう。  ○各班ごとに発表しましょう。	30	T：前時に各家庭で準備してあるものや準備しておくものについて調べてきたことを基に話し合ってください。 C：寒い時に毛布は必要だね。 C：水は一人一日2リットルは必要だね。 C：非常食はレトルトや缶詰かな。一週間分ぐらい準備しておいたほうが安心だね。 C：ナイフも必要だね。 C：すぐに持ち出せるようにリュックに入れておくといいんじゃない。

		C：救急箱はケガをしたときに絶対必要だと思います。 C：ラップや紙皿、ラジオ、懐中電灯が必要だと思いました。 C：新聞紙はごみを包んだり、寒い時は下に着たり、床に敷いたりできます。
終末	6 家庭に準備すべきものを、準備してもらえよう意欲付けを図る。 ○今日の学習の感想を書きましょう。 	5 T：家にあったほうがいいと思う物をプリントに書きましょ う。 C：洗面用具は必要。 C：ウエットティッシュかな。 ○次時までには家庭の非常用物品のストックを確認するように促す。 ★自宅に準備しておくべきものを理解し、進んで実践しようとする意欲を持つことができたか。 (観察・発言)
<児童の感想> ・地震の後にコンビニに何もなくなってしまったことにびっくりしました。家の人とよく話し合って、非常時に備えて準備していこうと思いました。 ・ぼくの家は準備してあるけど、学んだことを生かして足りない物を準備していかなくてはならないと思いました。 ・県危機管理センターでは、災害に備えた備蓄品の多さにびっくりしました。実際に自分の目で確かめることができてよかったです。		

3 講演会の様子

演題「子どもたちが主体となり地域社会に貢献できる防災教育を目指して」

講師 滋賀大学大学院教育学研究科 教授 藤岡 達也先生



滋賀大学大学院教育学研究科教授である藤岡先生から「子どもたちが主体となり地域社会に貢献できる防災教育を目指して」と題して、御講演をいただいた。

御講演では、児童の実態・地域の実態を踏まえ、防災教育の課題を明確にした教科等横断的で実効力のある指導計画の作成について、保護者・地域を巻き込むとともに、他地域の防災教育を参考にしながら、自助・共助の意識を高めていく必要性について御指導をいただいた。

授業については、総合的な学習の時間における児童の思いや願いを生かした指導と評価の一体化、各学年の評価規準に基づいた評価計画（多面的な見取り等）の設定、他の児童との探究的・協同的な学びによって新たな知を創造する態度や自己の生き方を問い続けながら、社会参画の意識を高めていくことの大切さについて御指導いただいた。具体的には、目標の到達度や達成度を量的・尺度的に判断するための基準を設定しながら、子どもたちの変容を見取っていくことである。これからも子どもたちの「自ら考え、最善の判断をし、主体的に行動する力」の育成を図りながら、危険を回避する能動的な力が身に付くように共通理解を図っていきたい。

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 防災教育に関連した学習や見学学習、体験活動等の取組を通して、危険を回避するための適切な意思決定や具体的な行動（避難）に移す必要性を実感するなど、防災を自分事として考えさせることができた。
- 須賀川市のハザードマップを参考にしながら、地域と防災・安全マップ作りに取り組んできた。自宅付近の危険箇所や地域の地理的な特色を把握することで、防災に対する自助・共助の意識が芽生えてきた。
- 授業実践では災害を、児童が直面する様々な危険と考え、新型コロナウイルス感染症も災害と捉えた。感染症を考えることを通して、感染予防策を分類したり、免疫力や抵抗力を高めたりする大切さに気付き、健康で安全な生活態度を形成していこうとする意欲につながった。

2 課題

- 生きた防災教育にしていくために、教科等横断的な指導計画を作成し、組織的・計画的・系統的な防災教育に取り組むとともに、児童の発達段階に応じた防災意識を高めていく必要がある。
- 防災教育は学校だけで完結できるものではない。地域によって想定される災害の重要度（地域の実態）が異なるので、保護者や地域住民と連携して活動する機会を設け、児童の知識や理解、地域の防災力を高めていくことが求められる。